ドイツ・バイエルンの農村は今

――石見神楽&未来農業研究団バイエルンツアー報告　その1

川村　一成（奈路・農業）

ケンプテン郊外の民宿の子供とその友達と（中央が筆者）

「おっ、――」「面白い」旅

出発直前の団長からの通信を見て、まず驚いた。「昼食と夕食は含まれていないから各自とるように」。どうりで安いと思った。しかし面白そうだ。

成田空港で団長に聞く。

―添乗員はどなたですか。

―おれだよ。

―ドイツ行ったことあるんですか。

―初めてだ。

―ドイツ語は。

―しゃべれるわけないだろ。

案の定、モスクワでの乗り換えで、団長の手荷物六個が行方不明になり、国際線の飛行機の離陸を二時間もストップさせたのに始まって、以後ホテルがなかなか見つからない、遅刻者は放置するなどトラブルとハプニングの連続。そしてそれを面白がる、たくましいけれど少々極楽とんぼ気味の団員たち。行きの機内で知りあったドイツ在住の日本人医師など「商社の連中とよく乗り合わせるんだが、彼らには何もない。しかし君たちの面白さは何なんだ」と言って、とうとういつの間にか我々のメンバーの一員となって一週間も同行してしまう始末。

こうして、観光パック旅行とは、一味も二味も違う研修と交流の旅が始まった。

裕福ではないが豊かな暮らしぶりのケンプテン付近の農村

今、だから、――「バイエルン

日本の耕地は、国土のわずか一四パーセント。高知県はそれよりも少ない。おまけに山間地が多く、農業だけでなく、地域そのものが危機的状況となっている。

一方、旧西ドイツでは「農村の崩壊は国土の崩壊」との認識のもと、いたずらに規模拡大を進めるのではなく、家族経営主体の農業を守り育てることにより、地域づくりを進めている。特に南部バイエルン州では、中山間地域が多く、これらの条件が不利な地での農業に対して、さまざまな独自の施策がとられているという。「バイエルンの道」と呼ばれるそれらの施策は、EC諸国にも大きな影響を与えているらしい。

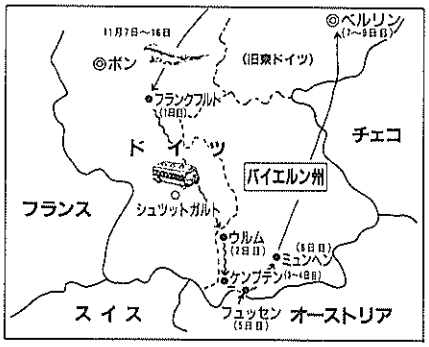
百聞は一見にしかず。この目で見てこよう。ただ視察研修だけでは芸がないから、数年前のドイツ・クラシックコンサートツアー一行がそのすばらしさに驚いた石見神楽団も一緒に行って、文化交流もしようじゃないかというのが今回の〝石見神楽&未来農業研究団〟ドイツ・バイエルンツアー。

◇　◇

以下、農業視察、農村のすばらしい景観とその維持、決して裕福ではないけれど、素朴で豊かに生きる農村の人たち、「粗放化」の勧め、条件が不利な地域の農業に対する保護施策、住民主導の村づくり、そしてドイツ再統一直後のベルリンの様子などをレポートしたいと思う。

（4回シリーズ）

ふるさと見聞録



ふるさと創生基金を活用して今年度から「ふるさと見聞録」が実施されています。広報ではこの事業を利用した皆さんのレポートを随時紹介していきます。